

国語

(2月3日)

開始時刻 午後1時00分
終了時刻 午後2時00分

注意事項

- 1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は20ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。
① 受験番号欄
受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
② 氏名欄
氏名とフリガナを記入してください。
4. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、10 と表示のある問いに対して◎と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の◎にマークしてください。(例)
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

Table with 5 columns: 10, a, b, c, d, e

次の文章を読んで、後の問い(一)〜(九)に答えなさい。

より困難なのは、「科学によって問うこと」はできるが、科学によって答えることができない問題群からなる領域で、トランスサイエンス問題と呼ばれる。A・ワインバーグがトランスサイエンス問題として取り上げたのは一九七二年のことである。本質的に、科学によって完璧に答えが出せる要素還元主義から脱却しなければならない問題群と云える。科学のみに閉じた発想では限界があることが明白であり、現代はそのような問題の解決が迫られているのである。とはいえ、昔から人々は生活の知恵としてトランスサイエンス問題を扱ってきた。身近な事例で生じているトランスサイエンスを挙げてみよう。

たとえば、福島原発事故で専門家がしきりに使った「想定外」という言葉は、原発の設計に地震の強さや津波の高さへの上限が「想定」されている、との言い訳であった。絶対に壊れない人工物は存在せず(建造することができず)、すべての人工物には安全基準が定められていて、それを満たせば合格となつて世の中に流通させることができる。①その安全基準は、材料の強度と耐用年数のような科学で測れる要素以外に、その対策のための経費とか手間とかが余りかかるといふような条件を考慮して決められている。私はこれを「技術の妥協」と言っているが、完璧から離れた「妥協」をしなくては技術は現実生活に活かさないのである。このような技術の安全基準をどう決めるか(どう想定するか)で妥協するか、どのより安全条件とするかはトランスサイエンス問題の「キー」と言える。

ある原子力の専門家は「安全基準」と言っているが、安全性を考へてあれもこれもと欲張ることは設計できない、切り切つて省略しなければならぬ、という意味であった。これは実に正直な発言で、技術は切り切りによって成立していることがよくわかる。②「実際上、どこで切り切れるかが問題となり、それは科学的判断のみで決まるわけではない。事故が起こる可能性を見積り、その事故が生じる頻度と考えられる被害の程度を秤にかけるのは科学の範疇だが、安全のための裕度をどれくらい持たせるか、事故が起こった場合にどこまで補償の負担ができるかは科学の範囲から外れている。あまりに裕度が小さすぎると安全性に疑問が生じ、高すぎると費用や時間がかり過ぎるので、それを実行する企業は現れないことになる。事故補償の負担が余りに過大なら、たとえその頻度が小さくても企業は手を出さないだろうし、原発のように事故補償を政府が肩代わりしてくれるなら企業も参画するようになる。技術には実行可能性(どこまで意欲をもつて実行しようと考えているのか)、参加する企業はどこまで責任を負おうとしているか、と云う、科学とは関係しない現実的配慮をトランスサイエンスしなければならないのである。建築の耐震基準や放射線被曝限度値などのように、時代とともに基準が変わってきたのは Y であり、時代が進むにつれ厳しい基準となってきたのは Z である。科学は絶対基準を示すが、技術は相対基準を示すのみである。そのため、技術の妥協レベルは優れてトランスサイエンス問題なのである。

- 1 -

別の種類のトランスサイエンス問題として、「共有地の悲劇」の類の問題もある。誰でもが使える共有地(より一般的には公共物)があると、羊飼いはなるべく多くの羊を飼おうとする。③しかし、われもわれもと羊飼いが多く集まり、かつより多くの羊を飼おうとすれば、たちまち共有地は荒れ果てて使え物にならなくなってしまうだろう。これは個人が責めを負うのではなく、みんなの損失である。このような共有地に関わる悲劇は、個人が責めを負わないから罪の意識がなく、損失はみんなが被るから薄められ、なかなか解決しないことが多い。④海洋での漁獲(早い者勝ち)とか、温室効果ガスの放出(出しっぱなし)とか、空中にばらまいた人工衛星の残骸(捨てっぱなし)とか、どこにも広がる環境ホルモン問題(化学物質の使いっぱなし)など、多くの共通の問題があり、今や世界全体の課題となっている。

このような「共有地の悲劇」に絡まる問題について科学ができることは、どこまで規制すれば悲劇をカウビできるかの目安を示せるだけであつて、具体的などのような方策を採用すべきかについては科学は何も言えない。科学はその問題に対して重要な情報を与え、参照事項としてしか機能しないのだ。

共有地の悲劇を解決するためには、共有地をなくしてしまう(私有地にして独占する、または誰にも使えないように使用を禁止する)か、それを使いたい人間が集まつて悲劇にならないよう何らかの使用協定を結ぶしかない。⑤かつては暴力によって共有地をなくしてしまつた(一国の領土にする)という不条理な解決法はなかったが、現代では平和的に交渉によって使用協定を結ぶようになっている。しかし、どのような協定を結ぶべきか、協定が守られているかどうかをどうチェックするか、協定破りがあった場合の対策をどうするか、などについて難解しているのが実情である。実際、世界中で実に多くの国際協定や条約や宣言が採択されたが、抜け穴があつたり(ワロン規制に関するモンテリオール議定書)、重要国が参加できなかったり(NPT核兵器拡散防止条約)など、トランスサイエンス問題に絡む部分で合意ができていないために実効性が低くならざるを得ないのである。

さらに私は、「最初から非倫理性を含む科学・技術」もトランスサイエンス問題に含めたいと思つている。原発は、①その大きな潜在的危険性から過剰に押しつけていること、②ウランという放射性物質を扱うために、採掘・精錬・装填・定期検査・廃棄物処理・廃炉の全過程において携し作業者が放射線被曝を押しつけていること、③放射性廃棄物を10万年にわたつて厳重管理を子孫に押しつけていること、④事故が起これば立地する地域の人々、そして全世界に放射線汚染を押しつけていること、という反倫理性を必然的に帯びている。いずれも、多数の人間や強い立場の人間が少数の人間や弱い立場の人間に「押しつける」という形をとっていることが反倫理性を如実に物語っている。そのような反倫理性を最初から帯びている科学なのだから、社会として採用するかどうかは科学以外の要素で決められるのは自明だろう。

たとえば、原発は人を残酷に殺傷することのみを目的として開発された非倫理的兵器である。だから、誰でもが一度最終的には廃絶されなければならないと言つても、当面は核抑止論の立場から核兵器は必要だと主張する。核兵器が存在することによって戦争が抑止されている、というわけだ。科学以外の役割を強調して非倫理的な科学・技術を受け入れようとしているのである。原発も同じで、右に述べたような非倫理性を知っているために、やはり最終的には原子力に依存しない社会にすべきだと誰もが述べるが、経済論理を持ち込んでは(温室効果ガスを出さないという屁理屈)つけて、必要だとすり替えているのだ。いずれも科学以外の論理で本質的な非倫理性を押し隠していると言えよう。(池内)「科学のこれから」による

(注) 裕度——規定値と試験結果の差のうち許容できる範囲。ここでは事故・災害に対する備えにおける「余裕」といった意味で使われている。

問一 傍線部A〜ウを漢字表記に改めた場合、これと同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜④からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、Aが1、イが2、ウが3。

A テンケイ
① 信号がテン滅する
② 未来へのテンが開ける
③ 人生をテン削する
④ 作者のテンが訪れる
⑤ 確かなテン拠を示す

イ カンアン
① 金をカンジヨウする
② 地域のカンシヨウに從う
③ 裁判のカンシヨウに從う
④ トンネルがカンツウする

ウ カイヒ
① 国の財政がカイヒする
② キンを例で説明する
③ ビンを例で説明する
④ ビンを例で説明する

- 3 -

- 2 -

問二 傍線部A「トランスサイエンス問題」に当てはまらないものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① 最初から非倫理性を含んでいる科学・技術
- ② 科学とは直接関係しない実行可能性の問題
- ③ 共有地の悲劇に絡まる問題
- ④ 科学技術の安全基準の決め方
- ⑤ 科学によって完璧には答えを出せない問題

問三 空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① その「想定」を行った者たちの責任が問われべきなのだ
- ② その「想定」を超えるような事態に備えておかなばならない
- ③ 自分たちは「想定」をそれなりにきちんと行っているだけだ
- ④ それを超える事態となったのだから自分たちには責任がない
- ⑤ その「想定」を行う上での計算の誤りなのだから仕方がない

問四 本文中には次の文が脱落している。この文が入る箇所として最も適切なものを、後の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① 6
- ② 7
- ③ 8
- ④ 9
- ⑤ 10

問五 傍線部B「それは科学的判断のみで決まるわけではない」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① 7
- ② 8
- ③ 9
- ④ 10
- ⑤ 11

問六 空欄 Y に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① 変化する時代の反映
- ② 絶対基準がないため
- ③ 科学の絶対化のため
- ④ 政府の方針によって
- ⑤ 基準が甘かったため

問七 空欄 Z に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① 倫理的要求による
- ② 科学の反省による
- ③ 技術の向上による
- ④ 政治的判断による
- ⑤ 相対的基準による

問八 傍線部C「科学以外の論理で本質的な非倫理性を押し隠している」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① 10
- ② 11
- ③ 12
- ④ 13
- ⑤ 14

問九 本文における筆者の考え、主張と一致するものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

- ① A・ワインバーグをはじめトランスサイエンス問題を取り上げてからすでに四〇年以上が経とうとしている現在、要素還元主義の立場に立つて科学と技術の力によってトランスサイエンス問題に対する完璧な答えを出していくことで、科学によっては答えられない問題群からなる領域を少しでも小さくしていくことがわれわれには求められている。
- ② 原爆は人を残虐に殺傷することのみを目的として開発された非倫理的兵器であるから、世界中の誰もが最終的には廃絶されなければならないものと言いが、核兵器が存在することによって戦争が抑止されるということは否定できない真理なのだから、倫理的尊重が抑止という実益かという問題も、きわめて重要なトランスサイエンス問題の一つだと言える。
- ③ 「妥協」をしなければ技術は現実生活に活かさないのだから、たとえば建築の耐震基準や放射線被曝限度量などの基準が、科学で測れる要素以外の条件を考慮に入れた上で設定された、ある種の妥協の産物であるのは致し方ないことであるが、そのような技術の安全基準をどう定めるかというのには、きわめて重要なトランスサイエンス問題だと言える。
- ④ かつては戦争という暴力によって共有地を私有地すなわち一国の領土に変えてしまおうということも行われていたが、これも大きな意味で共有地の悲劇を解決するための手段であったという点を考えれば、それを不合理的な解決法として斥けてしまおうのは短絡的であり、われわれにはより広いトランスサイエンス問題への視野を持つことが求められている。
- ⑤ 温室効果ガスの制限に関する京都議定書の採択時のように重要国が参加しなかったのでは意味がないので、どのような協定を結ぶべきか、協定が守られているかどうかをどうチェックするか、協定破りがあった場合の対策をどうするかといった問題以前に、まずは共有地を共有している全員に参加させることが、トランスサイエンス問題の解決には必要だ。

試験問題は次に続く。

モ

二

次の文章を読んで、後の問い一七に答えなさい。

自他の併存の例として、ここで東洋と西洋の物質観をくらべることにする。
これまで、西欧の自然科学は人間主体であり、人間の生活の向上だけを追求する経過を辿ってきたので、その意味では自分本位であり、これは「自」の立場であったと言える。
しかし、別の見方をすると、西欧の科学は普遍性を第一に尊ぶものである。すなわち、個々の「自」が持つ個性を超えた、全体の普遍性に注目し、これを求めるところに特長があるとも言える。そういう意味では西欧の科学は普遍性追求の学であり、東洋の自然科学はこれに対して個々の存在を尊重するものとしてよい。前者が何故そういう立場になったかという点、普通の成分を求める分析に依存したからであり、後者は、全体を「個体」として見る総観に立ったからである。対比の上の言い方をすれば、

X

西洋の自然科学は基本的には、「物事はすべて成分から出来ている。それで、対象の事物を成分に分解し、それを構成する要素を知る」ことが自然の理解であるとする。この要素で物を見る立場を分析(analysis)という。分析というときもある。これも analysis である。analysis という言葉を最初に唱えたのは、ボイル(Robert Boyle, 1627-1691)である。この人は英国の貴族の生まれで化学者、物理学者とされる。彼はアリストテレス以来の元素観が、単に観念的に自然の要素を考えるのを捨て、元素を分解の極限物質つまり、これ以上は分解しない物質と定義して、物質の相違は元素の違いや、運動の違いに基づくとした。そして、正確な実験によって得られる知識のみを「知識」とすべきであるとした。これは実証主義であり、これが近代化学の発端になったとして、彼は近代化学の父とされる。
これに対して東洋では上記のように、物をそのままがあるがままに認識する態度を採る。これを総合的という。少し違う感じがするが帰納的というところもある。帰納は演繹にも対比される言葉である。

「分析と総合」で西洋と東洋を対比する見方は、一面ではなるほど同調できるが、また他面ではそうともしれない。対比は結構だけれども、両者ともそれぞれ簡単に切り切れるものではないからである。
自然界の事柄はこの両者のバランスが維持されてはじめて自然界の運行が正しく行われるのである。ところが近來、人の生活や、心情にこのバランスが失われて来ているのではないかと憂慮されるのである。

今の教育は全面的に解析の流れになっている。それで、全体観を養う場を失なっていることが懸念される。解析のみであると細かく細かく細部に突

- 9 -

- 8 -

き進んでいって、しまいには何が何だかわからなくなる恐れがある。昔の語に、
Y
ということがある。それは、解析の行き過ぎをたしなめる言葉である。

総合というのは、経験で得られた知識を総合的にまとめて判断することをいう。その経験を持つには、時間と手間がかかるし、本人が自分で体験して知るべきことで、教えて教えられるものではない。それで教育するほうも、されるほうも「解析」のほうがやり易く、どうしても、解析に走り易い。とくに学校教育は、体系的知識の積み上げを進める方式をとるので、文句なしの体験を第一にする昔の職人教育をハイゲキするのではその傾向が強い。それで、近代社会は解析に強い人で埋まる状況になり、結果の評価を総合判断で行うことはほとんど無くなってしまった。運動競技すら、走る時間、泳ぐ時間で結果が表示されるようなメトリックな判定が可能な場合以外はそのようになったのである。アイススケートの演技や、飛び込み、その他の美術要素が入る競技では、技術と演技の芸術性などという分岐をつくって、その各々の評価を段階的な数字にあらわして、それを何人かの人に評価してもらって、その平均を評価にしている。解析操作を取り入れている。現代はこうして解析で埋まることになった。これが行きすぎると困ることである。なぜかという点、解析は成分を抽出する作業であるので、それのみに終わると全体の総合評価ができないからである。

解析と総合の間には、さらに重要な相違がある。それは、両者における「時間」のとりかたの違いである。「解析」の場合、解析をする人が対象に接するのは解析の間だけである。解析を終えて結果を提出すればおわりである。そういう意味では、問題に接する時間はその時限りの一過性である。これに対して、「総合」の場合は、対象に接する時間は持続的長期的である。前者においては、対象との接触は解析をしている間しかない。なぜなら、対象は解析されたあととは、刻まれて原体は形をどめていないからである。すなわち、解析の評価はそういう意味で瞬間的である。これに対して総合観は、色々な視点で、かつ長い時間軸で観察して、対象物の評価をする。物事の評価には後者のやり方が必要である。例えば、人間の生長を測定し、その将来に関わる教育はことにそうである。この視点が近來失われつつあり、重要な問題だと思ふ。

総合観は「もの」を全体とりまとめて一つに見る見方である。すなわちその物自体を一つの存在として認めるのである。だから、それは「自」を尊重する見方といつてよい。それに対して解析の態度は、物事すべてに共通の成分の存在を考え、そういう成分を明らかにしよう、物事は成分が分ればそれから合成できるという考えかたである。共通、普遍のものを考えるという立場は個別の反対を見る立場であり、自他の言い方でゆけば自分を見る立場と言えるであろう。そういうことで東洋は自、西洋は他ということになる。また、東洋は全体観、西洋は元々観に立つと言つてもよい。ともあれ、解析と総合は相反するものである。両者のバランスをとるのがむずかしいが、この均衡をとることは極めて大切であろう。

(藤原兼男「共生の思想―自他の衝突と協調―」による)

問一 傍線部ア、イを漢字表記に改めた場合、これと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑥からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが [12]、イが [13]。

- ア ハイゲキ
 - ① 車の高さを調べる
 - ② 自転車をハイゲキする
 - ③ 優れた俳優をハイゲキした劇団
 - ④ 人事課にハイゲキされる
 - ⑤ 赤字路線をハイゲキする
- イ
 - ① 病院でチリヨウを受ける
 - ② 両者の差は一目ヨウゼンだ
 - ③ ガクリヨウで生活を送る
 - ④ 会社のドウリヨウと出かける
 - ⑤ キエウリヨウ地帯を歩く

問二 空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑥から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は [14]。

- ① 前者が「普遍」、後者が「個体」
- ② 前者が「他」、後者が「自」
- ③ 前者が「成分」、後者が「全体」
- ④ 前者が「総合」、後者が「分析」
- ⑤ 前者が「西欧」、後者が「東洋」

問三 傍線部 A「対比は結構だけれども」における「だ」と同じ意味・用法で「だ」が用いられているものを、次の①～⑥から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は [15]。

- ① 彼は試験を受けるのをやめたそうだ。
- ② その本は読んでよかった。
- ③ 彼の泳ぎはまるで河童だ。
- ④ そのような発想は打算的だ。
- ⑤ とんだ災難にあつてしまった。

- 11 -

- 10 -

問四 空欄 Y に入る表現として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 16。

- ① 鶏口となるも牛後となるべからず
- ② 重箱の隅を突く
- ③ 木を見て森を見ず
- ④ 群盲象を撫でる
- ⑤ 羹に懲りて膾を吹く

問五 傍線部 B「これが行きすぎると困ることである」とあるが、こう述べる筆者の意図の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 17。

- ① 筆者は、解析で埋まることが行きすぎてしまうと時間と手間をかけて判断する人がいなくなると思想している。
- ② 筆者は、スポーツの世界にまで解析操作が入りこんでしまっている現状は行きすぎであるとして批判している。
- ③ 筆者は、知識を重視する学校教育が行きすぎて体験を重視する職人教育が駆逐されてしまふのを憂慮している。
- ④ 筆者は、平均値による評価が行きすぎてしまうと評価そのものに意味がなくなるのではないかと心配している。
- ⑤ 筆者は、解析操作ばかりに終始してしまつて結果を総合的に評価することができなくなるとを危惧している。

問六 傍線部 C「この均衡をとることは極めて大切であらう」とあるが、その理由の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 18。

- ① 解析と総合は相反するもので、両者のバランスをとるのがむずかしいから、そのバランスをとることが評価されるから。
- ② そもそも自然界の事柄はおのずと解析と総合のバランスがとれているものであり、両者相補することで広く深く考えられるから。
- ③ 解析が西洋にあたり総合が東洋にあたる以上、両者のバランスをとることは世界平和のためにも非常に重要なことであるから。
- ④ 解析操作には多くの人数が必要となり、平均を取るためにはある程度のバランスをとって総合化を図らなければならないから。
- ⑤ 短期的な解析と長期的な総合との間でバランスをとることができれば、短くも長くも長いよい時間になるから。

問七 本文における筆者の考え、主張と一致しないものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 19。

- ① ボイルは東洋の「総合」に対抗して「分析」という方法を用いることで、物質の相違は元素の違いや、運動の違いに基づくとする実証主義を確立し、近代化学を発達させ、近代化学の父と呼ばれるようになった。
- ② 「分析」と「総合」というそれぞれが担い所とする立場の違いで西洋と東洋を対比しようとするのは、ある面では納得できる見事な対比ぶり示すものの、それぞれ簡単に割り切れるものではないはずだ。
- ③ 知識を総合的にまとめて判断するために必要な経験を持つには時間と手間がかかり、またそれを他人が教えようとしても教えられるものではないので、教育現場ではおのずと「分析」という方法を選ぶことになる。
- ④ アイススケートなどの競技では、技術と演技の芸術性などに分けた評価を何人かでを行い、段階的な数字にあらわしたものを平均化する形で評価を実施しているが、これもまさに現代の解析操作の一例である。
- ⑤ 東洋総合観は「もの」を全体と見なすという点で全体を「個体」として見る全体観に立つとも言えるが、個別のものそれ自体を一つの存在として見るという意味では「自」の立場と言える。

試験問題は次に続く。

三 次の文章を読んで、後の問一～七に答えなさい。

ついでにこのことが、われわれの地球を瞬間に閉じこめる皆既日食がおこった。世界のアーモアを集めたこの宇宙ショーは日本で四十六年ぶりのこと、そして次回に同じ現象の生ずるのが二十六年後なのだといふ。その黒い太陽の出現をテレビで眺めながら、私は二つの物語を思い出していた。一つは、いまから三千年ほど前に書かれていたインド古代の物語である。ヒンドゥー教の神話や仏教説話の中で語られてきた話だ。かつて神々とアスラ(阿修羅)、すなわち悪魔たちの間で、不死をもたず甘露(アムリタ)をめくつてはげしい争奪戦が演じられた。このとき神々の側になつたのが太陽神と月神。それにならしてアスラ側に戻つたのがラーフという名の悪魔で、これが太陽と月を腹中にのみんでしまふ。だが最後になつて神々が勝利し、悪魔は空や海に逃げ去つた。このインド古代における皆既日食の神話が、不思議なことに仏教誕生の物語と結びつけられたのだから驚かされる。ブツダは十六歳で結婚し、妻とのあいだに男子を恵まれた。ところがかれは何を思つたのか、この二人の愛の結晶であるわが子に「ラーフ」という名を付けた。ラーフとは、さきの「ラーフ」(悪魔)からの派生語で、古代語のサンスクリットでは日食、月食の「食」を意味する言葉だった。太陽と月の光を覆い隠すものを指し、それが同時に「悪魔」を意味するようになったのだ。

ブツダはなぜ、わが子に「悪魔」という名をつけたのか。真相はいぜんとして歴史の闇に隠されているといふほかないが、しかしそのラーフはわが子父ブツダの教えに導かれて仏弟子の一人「羅睺羅」(音写語)へと転生することになる。とにかく、これはこれで、皆既日食という宇宙ショーの背後に横たわる苦悩する人類史のひとつ、といふことができるのではない。

も一つ、私が思い出していたのが落日の光景である。太陽が西の水平線に沈み、東の空から月がのはつてくる、あの何の変哲もない現象のことだ。かつてインドや中国、そして日本の仏教徒たちはその落日のかたに浄土をイメージし、現世のわずらいや障害からの脱出を夢見てきたことを思い出さず。その心の連伝だけは、何も仏教徒にかぎらずこの日本列島の意識の底にはりついていていたことに気づく。落日をみて感動の思い出語る人間は、いまなおあつたないものである。

話は変わるが、一九九七年(平成九年)十一月下旬のことだった。私はあわただだしくアメリカのヒューストンに飛んだ。スペースシャトルに乗り込んで、日本人初の「宇宙遊泳」に挑戦する土井隆雄さんにお目にかかり、お話をうかがうた。知られているように今日、「国際宇宙ステーション」計画が最後の段階を迎え、人類による宇宙での長期滞在が始まろうとしている。その未知の経

験はかならずやわれわれの人生観や世界観、さらには美意識や芸術感覚にまで大きな影響を与えるにちがいない。そこからどのような課題が生ずるか、そのための予備的な研究が十年前に宇宙開発事業団(当時)の委託で、関西にある国際高等研究所でおこなわれたことになった。たまたま私はその一つのクループの座長を占めることになり、その縁で急ぎよヒューストンに出張することになったのである。

広大な敷地を持つジョンソン宇宙センターの近くに、日本の宇宙開発事業団の事務所があった。まさに搭乗直前の、ギッシリつまった訓練日程の合間をぬっての面談だった。冒頭土井さんは、子供のころから天体や星座を観測し、宮沢賢治に関心をもっていたといわれた。「雨ノモマケズ」や「銀河鉄道」が好きだと胸のうちをさらされたが、話が宇宙イメージへと転じたとき、宇宙の目的をもつて創られたものであり、その全体が神のようなものに感ぜられるといわれた。その発言が、私にはとても新鮮なものに思われたのである。

それという以前から、アインシュタインのある言葉が気になっていたからだった。かれは宇宙には「中心」というものがあるどこかに書いていたのである。むしろ私のかれの相対性理論については何の知識もない門外漢である。けれども時間的にも空間的にも「相対的」であるはずのこの宇宙に「中心」があると感じているらしいかれの思考方法が、私には面白かった。アインシュタインはその中心をさすに「神」とは呼んでいなかったが、しかしかれのいう「中心」はかぎりなく「神」に近い概念ではないかと、勝手に思っていたのである。

宇宙には中心が存在するという見方の背後には、ひょっとすると一神教的な思考の反映がみとめられるかもしれない。それにはたいして、土井さんのいうように宇宙の全体が神のようなものに感ぜられるというイメージの奥には、万物に生命をみとめる汎神論的な思考の片鱗が宿っているのではないだろうか。現に、こんどの皆既日食の宇宙ショーをホウドウする場面でも、それを X ととらえる声や言葉が躍っていたのがとても印象的だったのである。

むしろこのような大きな比較だけで、何かを客観的に言い立てようなどという目論見が私にあるわけではない。ただ、さきほどのアインシュタインの言明にもどって言えば、相対性という科学的認識と長い人類の歴史を経て受けつがれてきた文化的イメージとのあいだには、つねに変わらぬギャップが横たわっているのではないかと、ということを書いてみたかったのである。

いわば脳のレベルでは宇宙を相対的であると認識してはいても、しかし感覚のレベルではかならずしもそうはならない。そもそもコスモスには「中心」があるべきだとする。文化遺伝子のようなものが作動する場合だってあるにちがいないのである。

ヒューストンからの帰路、私は米航空宇宙局(NASA)が発行している「宇宙開発・Q&A」という小冊子を手にしたが、読んでいて驚いた。アメリカが宇宙開発を進める目的は二つある。一つは科学の進歩のため、もう一つが金のためと書いてあったから。

はてさて、日本人ならこれに何と答えるか。科学の進歩のため、に異論を唱えるものは一人もいないだろうが、しかし金のため、とはおそろしく誰にも口にはしないであろう。そこでやはり、 Y という例によって口あたりのいい答えが返ってくるのではないだろうか。(山折哲雄「危機と日本人」による)

問一 傍線部ア、イを漢字表記に改めた場合、これと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 、イが 。

ア ジモク	イ ホウドウ
① 契約に印鑑をシヤンする	① 先生からシドウを受ける
② シダンが成立する	② 娘の旅行にドウコウする
③ 上司にジヒョウを提出する	③ 学問のオウドウを行う
④ ジド科で診察を受ける	④ ドウサツ力が要求される
⑤ ジゼンの策を講じる	⑤ カドウ式の書簡を作る

問二 傍線部A「これはこれで、皆既日食という宇宙ショーの背後に横たわる苦悩する人類史のひとつま、ということができるのではないか」の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 皆既日食という宇宙ショーを眺める人間は古代からいて、インド古代の神話などはその背後に人類の苦悩を種々たえさせている、ということ。
- ② 皆既日食という壮大な宇宙ショーは有史以来何度か繰り返されてきたが、その長い歴史の傍らに人類の歴史も流れてきたのだ、ということ。
- ③ 皆既日食という現象は人類誕生の前から繰り返されてきたが、それを宇宙ショーとして眺める歴史は人類が築き上げたものだ、ということ。
- ④ 皆既日食という宇宙ショーを眺めながら、古来人間たちはそこに自らの苦悩を重ねて神話や物語を生み出してきたのだ、ということ。
- ⑤ 皆既日食という宇宙ショーの背後には、苦悩しながら偉大な宗教を切り拓いたブッダという人間の歴史が横たわっている、ということ。

問三 傍線部B「その発言が、私にはとても新鮮なものに思われたのである」の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 土井氏の言葉の中に、宇宙には「中心」というものがあるというアインシュタインの言葉と共通する。神教的な感じ方がうかがえたことが、筆者には新鮮だった。
- ② 宇宙開発の最先端の場に立っている人物の口から宇宙に神の意志が宿っているというおよそ非科学的な発言が出てきたことが、筆者には驚くべきことだった。
- ③ 宇宙開発の最先端の場に立っている人の宇宙イメージを作り出していったのが宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」のイメージだったことが、筆者には新鮮に思えた。
- ④ 宇宙開発の土井氏にも物理学者のアインシュタインにも共通して、科学認識と裏腹の文化的なイメージがあることが、筆者にはとても興味深く思われた。
- ⑤ アインシュタインの言葉に対して、土井さんがはっきりと宇宙の中心というものは「神」のことにはかならないと言いつつ、筆者は大きな教示を得た。

問四 空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 人類の歴史
- ② 「神秘」のドラマ
- ③ 世紀の天体ショー
- ④ 宇宙のドラマ
- ⑤ 神の「啓示」

問五 傍線部C「文化遺伝子のようなもの」に当たらないものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 皆既日食の様子をテレビで見ながらインド古代の物語を思い起こすこと。
- ② 落日を見て、そのかなたに浄土のイメージを描いて現世のわずらいや障害からの脱出を夢見ること。
- ③ 宇宙を目的をもって創られたものにとらえ、その全体を神のようなものと感じること。
- ④ 宇宙には中心のようなものがあると感ずること。
- ⑤ 皆既日食という天体ショーを神聖なものと感じてしまつこと。

問六 空欄 Y に入る表現として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 宇宙開発のため
- ② 国の発展のため
- ③ 人類の夢の実現のため
- ④ 文化遺伝子のため
- ⑤ 宇宙の中心をさがすため

問七 傍線部A「これはこれで、皆既日食という宇宙ショーの背後に横たわる苦悩する人類史のひとつま、ということができるのではないか」の説明として最も適切なものを、次の①～④から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 皆既日食という宇宙ショーを眺める人間は古代からいて、インド古代の神話などはその背後に人類の苦悩を種々たえさせている、ということ。
- ② 皆既日食という壮大な宇宙ショーは有史以来何度か繰り返されてきたが、その長い歴史の傍らに人類の歴史も流れてきたのだ、ということ。
- ③ 皆既日食という現象は人類誕生の前から繰り返されてきたが、それを宇宙ショーとして眺める歴史は人類が築き上げたものだ、ということ。
- ④ 皆既日食という宇宙ショーを眺めながら、古来人間たちはそこに自らの苦悩を重ねて神話や物語を生み出してきたのだ、ということ。
- ⑤ 皆既日食という宇宙ショーの背後には、苦悩しながら偉大な宗教を切り拓いたブッダという人間の歴史が横たわっている、ということ。

問七

本文における筆者の考え・主張と一致するものを、次の①～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 27。

- ① プッタがわが子に「悪魔」という名をつけた真相はいぜんとして謎ではあるが、皆既日食が明けるように、いずれ真相は歴史の間の中から姿を現すだろうと思われる。
- ② 土井氏の場合、法華経を信じた宮沢賢治に対する関心から宇宙への夢が育まれたということが、その宇宙イメージの中に宗教的なイメージをもたらしたものと考えられる。
- ③ 宇宙には中心のようなものがあると考え、皆既日食という天体ショーに接して神話を紡ぎ出してしまふような心性との間には、共通するものがあると考えられる。
- ④ 西洋における相対性という科学的認識と東洋で長く受け継がれてきた文化的イメージとの間には、「二神教」対「汎神論」という大きなギャップがつねに横たわっている。
- ⑤ 日本人が宇宙開発に対して口当たりがいい答えしか述べないことに比べれば、金のためと答えるNASAの回答はいっせ深く信用できるものであると言えるのではないか。

— 20 —